4 グランシップ伝統芸能普及プログラム

1 子どもたちが触れる「はじめての劇場」

静岡県コンベンションアーツセンター・グランシップは，「文化創造と交流の拠点」として静岡県が設置した県立の複合文化施設で，音楽や伝統芸能，演劇，イベント，展示，講演会など，多彩なジャンルの企画事業を行っています。その中でも子どもたちに上質な文化に触れる機会を提供するため，「はじめての劇場」をコンセプトに，様々な鑑賞制度を実施しています。

平成 18 年度から，アウトリーチ事業として県内の学校などで，国内外や県内の芸術家による多様な形態・ジャンルのコンサートやワークショップなどを積極的に展開しています。能や狂言，文楽に加え，講談や浪曲といった話芸など，伝統芸能のプログラムも継続して開催してきました。

また，グランシップは開館当初から静岡県の外郭団体である公益財団法人静岡県文化財団が施設管理・運営を担ってきました[1)]。公益法人・公立文化施設という公立の組織の立場として，公共性，公益性のある事業に取り組むことは社会的な責務であるため，子どもたちへの教育普及的なプログラムの実施は財団運営の主要なミッションの 1 つです。そのため，静岡県という地域の実情を重要視して，常に地域の団体や教育機関との連携を図りながら事業を進める必要があります。また，施設運営や事業実施のため公演・イベントの企画制作を行う中で，事業の組み立てや準備・運営のノウハウを培い，実演家との連絡調整などのコーディネートを日常的に行っています。

それらの組織的な性質と培ったノウハウを活かして，「伝統芸能普及プログラム」の中では，“語り手”である実演家や実演団体と，“聞き手”や“受け手”である地域の団体や教育機関・学校の間の“つなぎ手・プログラムパートナー”として，文化財団が関わっています。

2 グランシップ伝統芸能普及プログラム

平成 23 年度から，県内の文化施設や教育機関，市町と連携し「グランシップ伝統芸能普及プログラム」を展開しています。地域性や連携先となる各機関の実情を踏まえて，主催者の要望や会場の条件に合わせて内容や出演者を個別に設定して行うオリジナル性の高いプログラムです。単なる一過性のイベントではなく，能楽を主体とした伝統芸能の普及に長期的な視野を持って取り組んでいます。大学や小中学校でのワークショップや，大学生を中心としたプロジェクト形式のもの，公演を目指した長期にわたるプログラムなど，実施形態や内容は様々です。特に子ども対象の事業では，能楽を嫌いにならないように，はじめて伝統芸能に触れるときに，「わからない」，「つまらない」といったネガティブな印象を持たないように注意を払っています。日本の文化の考え方を知ってもらうため，能楽師へ親しみを持ってもらえるような仕立てにし，はじめての出会いの場であることを意識して，関係機関や実演家と一緒にプログラムを組み立てています。

連携先となる主催者は，教育機関の大学などをはじめ，市町の文化振興財団や民間団体や企業の方など様々で，これまで 40 程度のプログラムを実施しています。

プログラムには 5 つの特徴があります。

1 点目は，地域と連携したプログラムを目指して，プログラムパートナーとしてバックアップを行うことです。単独主催での実施による単なる興行的なイベントで終わらせず，教育機関や地域の文化施設とともに協議を重ねながら，継続的に事業の展開ができるように支援しています。

2点目は，各地域や各機関（市町のホールや学校，大学など）の実情をヒアリングした上で，内容や出演者を個別に設定して，オリジナル性の高いプログラムを構成することです。県の文化財団での業務で外部の方とやりとりをする際，何か取り組みたいことがある，こんな事業をやってみたいといった希望が出てくる場合があります。そこから要望や課題，条件など，詳細を聞き取っていき，実際に事業の組み立てを一緒に考えていきます。その際に，初めに費用の問題なども確認し，予算の有無や日程的な制約，どういった方を対象にするかなど，諸々の条件を精査していったうえで，内容と条件に合う方で，尚且つプログラムの趣旨に理解のある実演家を財団から提案します。

3点目は，芸術の魅力とともに，演者の人としての魅力を伝えることに重点を置いていることです。舞台上の技術や，単なる芸能の知識の情報だけでなく，芸術家の物事に対する姿勢や考え方，経験などを伝達しています。能楽師の方の人となりに触れてもらうことを大切にし，一流の人との出会いの中で，参加者が新しい気づきを持って，日本の文化への理解を深めることも重要な目的です。特に，実演家の人としての魅力は，劇場での普段の公演などでは，なかなか一般の方に伝えきれない部分でもあるため，このような普及プログラムの中で，実演家その人の魅力を伝えていくということは，文化芸術の振興を担う財団全体の運営としても非常に重要な役割を担っています。

4点目は，語り手の実演家自身が一方的に進めるプログラムではなく，なるべく参加者側に立った視線で，芸術家の言葉や考え方について，咀嚼やフォローをしながら，相互理解ができる環境をつくることです。同じ内容のことを話していても，各団体や実演家の方，教育機関など，立場が違うと使用する言葉・用語が異なることがあります。語り手側の熱い気持ちだけではなく，受け手側・聞き手側が何を求めているのか，何を知りたいのか，受け手側に実際に伝わる言葉がどういうものなのか，それらの仲介役ができる方を設定します。現場に応じて，演者と参加者との仲介役を担う案内人，大学生や市町のスタッフ，教員，場合によっては教科書などを使用し，芸術家の言葉や考え方をきちんと咀嚼してフォローすることに重点を置いています。

5点目は，実演家（語り手）の方との当日の接点以外に，本プログラムを通して関わった多くの人が，将来にわたって文化・芸術が有効な社会資源であると認識してもらうきっかけにするということです。プログラムを進めていく中で，事前の情報伝達や，能楽独特の“間”の理解の促進，事業後の行動フォローなど，可能な限り実践してもらい，実演家や関係機関，参加者自身にも，それぞれの立場から社会資源として文化・芸術への認識を深めてもらうことを目指します。

3 事例紹介

(1) 音楽教育からアプローチする能楽

静岡大学教育学部教科教育学専攻の学生のため，大学のカリキュラムに組み込んで実施しました。音楽教育として能楽の音楽的な要素を研究・体験するためのプログラムで，将来，音楽の先生を目指す大学生が対象です。プログラムに参加した大学生は，中学生を相手に実際に能楽の模擬授業を行いました。

主催	国立大学法人静岡大学
対象	音楽の教員を目指す教育学部の大学生
監修	大倉源次郎（大倉流小鼓方十六世宗家／人間国宝）

〈プログラムの流れ〉

①大学生向けの能楽の講義+体験

教育学部の学生が実際に中学校で授業をするための事前勉強会として，能楽師による講義と体験を通して，日本の伝統的な音楽や特質を学びます。学生が普段慣れ親しんでいる西洋音楽には楽譜があり，同じ楽器であればいつも同じ音が鳴りますが，和楽器では明確な譜面がなく，他の奏者と感じあう「間」が重要です。

演奏するときにも常に同じ音ではなく，そのと

写真①　実際に掛け声を出して息を合わせて小鼓を鳴らし，能楽独特の「間」を体験（於：静岡大学）

写真②　大学生がつくった指導計画をもとに，中学生に音楽の授業を実施（於：菊川市立菊川西中学校）

きに集ったメンバーで，環境や状況に応じた一番いい音を奏でるという“調和”の考え方なども体験を通して学んでいきました（写真①）。

②大学生が教育実習で模擬授業を実施

能楽師から学んだことを授業の指導計画に落とし込み，実際に子どもたちに授業を行います（写真②）。

③振り返り

模擬授業後には，振り返りの会を実施しています。この振り返りの会は，グランシップのアウトリーチ事業でも非常に重要なもので，本番をやってそのまま終わりにするのではなく，必ずその場で振り返りの会を実施し，関係者揃って成果や課題を共有し，次の展開へ繋げていきます。

(2) 国語教育からアプローチする狂言

国語教育での狂言について，教育学部の大学生と教員向けに，実演やワークショップを踏まえて狂言についての理解を深めて，教育現場へ繋げてもらうよう静岡市にある常葉大学と一緒に組み立てたプログラムです。

写真③　狂言を見たことのない大学生に実演をしっかり鑑賞してもらい狂言への理解を深めてもらう（於：常葉大学）

主催	学校法人常葉大学
対象	①国語の教員を目指す教育学部の大学生 ②教育学部の大学教員と学生
監修	三宅右矩，三宅近成，金田弘明（和泉流狂言方）

①国語の教員を目指す大学生へのプログラム

将来，国語の教員を目指す教育学部初等教育課程の学生を対象としたプログラムとして実施しました。狂言について大学生自身が知り，体験することで，授業の中で子どもたちに伝えるべきポイントを考えてもらう内容です。狂言の講義をもとに，小学校の国語の教科書に採用されている演目，狂言「棒縛」の鑑賞や，狂言の発声法を体験し，本物の芸能に触れる機会をつくりました（写真③）。

②教育学部の教員と大学生へのプログラム

常葉大学教員の研修・研究教育懇話会として実施したもので，狂言の基本的な解説に加え，ワークショップを開催しました。摺り足の稽古の体験や，代表の方には実際に能面をつけた状態での視界の狭さなども体感してもらい，芸に対する姿勢や考え方を学んでいく組み立てにしました（写真④）。

写真④　摺り足のワークショップでは，腰を落としながら姿勢を保つ難しさを体験してもらう（於：常葉大学）

写真⑤　三保松原が登場する和歌を紹介（於：静岡市立久能小学校）

(3) 地域の文化資源からアプローチする能楽

静岡県の景勝地・三保松原（みほのまつばら）を舞台とする能「羽衣」を題材とした絵本[2]を作成した静岡県立大学の国際関係学部とともに連携事業として実施したプログラムです。

主催	静岡県公立大学法人静岡県立大学
対象	能「羽衣」の絵本の普及を目指す国際関係学部の学生
監修	山階彌右衛門（観世流シテ方）

能「羽衣」の普及を目指す有志の大学生“羽衣つたえ隊”と一緒に小学生向けに授業を組み立てました。まず，大学生による絵本「羽衣」の朗読や，三保松原が取り上げられた和歌を用いた解説を行いました（写真⑤）。続いて能楽師によるワークショップでは，物語に登場する羽衣のイメージを膨らませられるように，能楽の舞台で使用されている装束を実際に子どもたちに見てもらいました（写真⑥）。

さらに，謡体験や能の型（姿勢や摺り足）の体験を通して，地域の文化資源を切り口に能楽への理解を深めてもらえるようプログラムしました。

写真⑥　三保松原の写真や能の装束を実際に見て，物語へのイメージを膨らませてもらう（於：静岡市立久能小学校）

4 次世代に受け継ぐ取り組み

教育現場で活躍する教員，未来の教員が伝統芸能を学ぶことは，さらに次世代へと日本の文化を受け継ぐための重要な取り組みとなっています。学習指導要領に日本の伝統・文化理解教育が加わりながらも，現場で教鞭をとる先生が，伝統芸能に触れたことが無い，これまでしっかりと学んだことが無くどのように指導していいかわからないといった現場の声が届いていました。そのような教育現場を支援するためにも，子どもたちへのアウトリーチ活動とともに，教育機関と連携し現場の実情に合わせた伝統芸能普及プログラムを展開しています。そこでは，日本の伝統芸能を受け継ぐ実演家の芸に対する姿勢や考え方，芸能そのものの特質に触れることが，一番の教育普及，理解促進につながっています。

1) 平成 18（2006）年度から指定管理者として管理運営を担う。

2) 絵本『羽衣』（監修：山階彌右衛門，文：鈴木さやか，絵：なかおまきこ，2015 年）は静岡市内のすべての小学校に配布されている。

（北岡慶子）